世界短編名作選
ドイツ編

監修　蔵原惟人

新日本出版社

世界短編名作選
ドイツ編

監修　蔵原惟人
編集　井上正蔵
　　川口　浩
　　佐藤静夫
　　北条元一

新日本出版社

世界短編名作選　ドイツ編

1977年8月30日　初　版
1981年8月20日　第2刷

定価 1200円

監修　蔵原惟人
編集　井上正蔵
　　川口浩
　　佐藤静夫
　　北条元一
発行者　松宮龍起

郵便番号151　東京都渋谷区千駄ケ谷3の11の8
発行所　株式会社　新日本出版社
電話 東京（478）3311（代表）
振替番号　東京3-13681

印刷　亨有堂印刷　　製本　小泉製本

落丁・乱丁本がありましたらおとりかえいたします．
本書の内容の一部または全体を無断で複写複製（コピー）して配布することは，法律で認められた場合を除き，著作者および出版社の権利の侵害になります．小社あて事前に承諾をお求めください．

世界短編名作選　ドイツ編

目　次

ノヴェレ（伝奇）……ゲーテ／道家忠道訳　5
犯罪人……シラー／川口　浩訳　27
サント・ドミンゴ島での婚約……H・クライスト／川口　浩訳　51
ローランス嬢物語……ハイネ／井上正蔵訳　85
山番小屋の一夜……ヘッベル／川口　浩訳　119
幸運の鍛冶屋……ケラー／中野和朗訳　133
マーリオと魔術師……トーマス・マン／佐藤静夫訳　163
黒いオーストラリア……キッシュ／北条元一訳　217

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo

ジュール……ヴォルフ／北条元一訳　231
野　獣……ブレヒト／井上正蔵訳　269
マルガレーテ・ヴォルフの四十年……ゼーガース／新村　浩訳　277
ベルリンのアンティゴネー……ホーホフート／小西　悟訳　297
解　説……佐藤静夫　313

ノヴェレ（伝奇）

ゲーテ
道家忠道訳

ヨハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテ

（一七四九～一八三二）

代表的作品は『若きヴェルターの悩み』（一七七四）、『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』（一七九五～九六）、『ヴィルヘルム・マイスターの遍歴時代』（一八二一～二九）、『ファウスト』（第一部一八〇八、第二部三一）など多数。

濃い秋の霧が、朝早い侯爵の居城の広い中庭をまだ包んでいたが、しだいに薄れてゆくヴェールを通して、乗馬や徒歩の狩猟の一行が入りみだれて動いているすがたが、もうそこはかとなく見えた。近くにいる者たちのせわしげな動きが見分けられた。あぶみの釣革を伸ばしたり、縮めたり、猟銃や弾薬入れを手渡し合ったり、背嚢の位置を直したり。一方犬たちは待ちきれなくなって、革紐をひっぱったり、引留めようとする人も引ずって行きそうな勢だった。またあちこちで、馬たちも、烈しい天性に駆りたてられてか、騎手の拍車に刺激されてか、気負いたっていた。騎手の方も、この薄明りの中でも、人目に立ちたいという虚栄心を否定することはできなかった。ところでみんなは侯爵を待っているのだった。侯爵は若い夫人に別れを告げに行ったまま、あまりに長いこと、手間どっていた。

ごく最近結婚したばかりの夫妻は、もう気持がぴったり合うという幸福を感じていた。二人とも活動的で活発な性格であり、おたがいの好みや努力に関心をもちたいと思っていた。侯爵の父は、国民がみんな同じように勤勉に日々をくらし、同じように働きはげんで、自分なりにまず儲け、それから楽しむべきだということが明らかになって来たあの時点（自由平等をかかげたフランス大革命を暗示する）を体験し、それを役立てたのだった。

この政策がどんなに成功したかは、ちょうど大市の開かれているこの数日に、目で見ることができた。この市は見本市と言ってもよいほどのものだった。侯爵は昨日、商品の積みあげられた混雑の中を乗馬で夫人を案内し、ちょうどこの場所でいかに山地が平野部と幸多い交易をしているかを目で見させた。侯爵は現場で夫人に、自分の所領地の産業活動に注意を向けさせた。

さて侯爵はこの数日もっぱら部下たちと、これらの押寄せてくる商品について相談をし、とくに大蔵大臣と長時間仕事をしていたが、主猟の頭の言い分もやはり聴き入れねばならなかった。彼の申し立てを聴くと、この恵まれた秋日和に、ずっと延期されていた狩猟を企てるという誘惑に抵抗することは不可能であった。狩猟は、侯爵自身にとっても、多くの他所から来たお客たちにとっても、特別な、めずらしい祝祭なのである。

侯爵夫人はいやいやながら残ることになった。みんなは山地のずっと奥まではいりこみ、そこの森に平和にくらす

鳥やけものたちを、思いがけない行軍によって騒がす計画だったからである。

別れるとき、侯爵は手抜かりなく、夫人に伯父の侯爵といっしょに、遠乗りに出かけるようにと勧めた。彼は言った。「それに、うちのホノーリオを馬番兼侍従として、あなたに残しておくよ。彼は万事世話をしていくだろう」このことばどおりに彼は、下に降りてゆくとき、容姿すぐれた一人の若い男に必要な指示を与え、それから間もなく、お客やお伴とともに姿を消した。

侯爵夫人は、夫が中庭に降りてゆくまでハンケチを振って見送っていたが、それから裏側の部屋にはいっていった。そこからは、山に向って広い眺望が開けていた。この城そのものが河から登ったいくらか小高いところに立っており、前にも後ろにもさまざまなみごとな景色が見えるが、ここの眺望はことさらすばらしかった。夫人は性能のよい望遠鏡が、昨日の夕方置いたままの位置にあるのを見つけた。昨夕みんなは、茂みや山や森の頂きの上に、大昔の先祖の城の廃墟が高々とそびえているのを眺めながら談笑したが、その城跡は夕日に照らされてくっきりと浮び上り、大きな光と影の塊が、古い時代の堂々たる記念物の全貌を、この上なくはっきりとみせてくれたのだった。今朝もまた、物の姿を近よせるレンズを通して、さまざまな種類の樹々は壁の間に、勝手気ままに、長い年月をかけて伸びたのだ。しかし美しい夫人は望遠鏡を、いくらか下の方の荒れた石がちの平地の方に向けた。狩猟の一行がそこを通りすぎるはずだったからである。夫人はその瞬間を辛抱強く待ったが、その期待ははずれなかった。というのは、望遠鏡の明確さと拡大力のために、夫人の輝く眼は、侯爵と主馬頭(めのかみ)をはっきりみとめたからである。そればかりでなく、夫人はまたもやハンカチを振らずにはいられなかった。それは、一瞬立ちどまって、振向くのが、見えた、というより想像されたからである。

伯父侯爵、フリードリヒがやがて、案内の声とともに、画家をつれてはいって来た。画家は大きな紙ばさみを小脇にかかえていた。「姪(めい)御どの」と年とった頑健な侯爵は言った。「ここで先祖の城のスケッチをお見せしますよ。あの巨きな攻めと守りの建造物が、いかに大昔から、歳月とその風化作用に抵抗して来たか、それにもかかわらずあちこちでその石壁が退却し、ここかしこでくずれて荒れた廃墟にならざるを得なかったかを、さまざまな側から目に見えるようにするために描いたものじゃ。ところでわれわれ

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo

は、この荒れた場所にもっとらくに近寄れるようにするために、いろいろやって見た。そうするだけで旅人や訪問者たちを驚かせ、うっとりさせるには、十分だったからな」

侯爵はスケッチを一枚ずつ指さしながら、ことばを続けた。「外側の城壁を通る狭い路を上って、本来の城の前に達したここで、われわれの前には大きな岩がそびえている。それはこの山全体のもっとも堅固な岩じゃ。さてこの岩の上に塔が築かれている。しかしどこで自然が終り、人工と手仕事がはじまるかは、誰も言うことはできんじゃろう。さらにその脇には城壁がくっつけられ、外壁との間の空地はテラス風に下の方にのびておる。しかしわしの言い方は正しくはない。というのは、この太古の山頂をとりまくのは、もともと森じゃったからだ。百五十年の昔からここに斧の響いたことはなく、いたるところに巨きな幹が伸びておる。もし城壁に迫って行こうとすると、すべすべした楓や、かさかさした樫、すらっとしたとうひが、幹や根で刃向ってくる。これらの樹のまわりをわれわれはうねうねとまわり、歩く路を用心深くつけてゆかねばならぬ。見なさい、この画家先生がこの特徴的なところを何とみごとに紙に描いたか、さまざまな幹や根の種類が、壁の間にもつれこみ、大きな枝がうねうねと隙間をつきぬけていったかが、何とよくわかることだろう。このジャングルはほかに無い、偶然に生まれたただ一つの場所だ。ずっと昔に消えてしまった人間力の古い痕が、永遠に生きて働きつづける自然と、この上なく真剣に闘っているのが見えるのだ」

もう一枚の絵を見せながら、老侯爵は話をつづけた。「さてこの城の中庭にたいしては、あんたは何と言われるかな。ここは古い塔門が崩壊したので、はいれなくなっていて、ずっと昔から誰一人足を入れたことがない。われわれは横の方からはいりこもうと試みて、城壁に穴をあけ、地下室を爆破して、楽な、しかし秘密の通路をつけた。中庭内部は取片づける必要はなかった。ここには平らな岩のてっぺんが、自然のままに地均らしされているのだ。しかしここかしこに巨きな樹が、幸運にも機会をみつけて根をおろしている。それらの樹々は、ゆっくりと、しかしきっぱりと生長し、今では、かつて騎士たちが行き来した回廊の中まで大枝をのばし、それどころか戸や窓を通して丸天井の広間まではいりこんでいる。われわれはそれをそこから追払おうとは思わない。樹々は主になってしまったのだし、そのままでいるがよいのだ。ふかぶかと積んだ落葉をとりのぞいて見ると、世にも珍しい平らな場所をみつけ

た。こんなたぐいのものはおそらく世界中で二度とは見られないだろう。

こういういろいろのものを見たあとで、なお珍らしく、現場に行って見なければわからないが、主塔にのぼる階段に一本の楓が根をおろし、たくましい樹になっていて、涯しない眺望のために尖塔にのぼろうとするには、この樹のそばを通りぬけるのがやっとやっとというほどだ。しかし塔の上に出ても、木陰の中に気持よくとどまることができる。というのは、この樹は城全体の上に、すばらしく高く空中にそびえているからだ。

というわけで、われわれはこの腕のたしかな芸術家に感謝しよう。彼はいろいろな絵でこんなにみごとに、すべてのものを、まるで目の前にあるように、納得させてくれるからだ。彼は一日の、そしてこの季節の一番よい時間を、このために費し、幾週となくこれらの対象のまわりを動きまわったのだ。この隅には彼と、彼に附けた番人のために、小さな、心地のよい住家がしつらえてある。彼がそこで、野山や中庭や城壁へのどんな美しい眺望や景観を作りだしたかは、あんたには信じられぬくらいだよ。ところで今はすべてが、すっきりと、特徴をよくとらえてスケッチされたので、彼は山をおりたここで、らくらくと仕上げをするだろう。われわれはこれらの絵で、庭沿いの広間を飾ろうと思う。うちの規則正しい花壇や園亭や木陰の並木道の上に目を遊ばせる人は誰でも、あの山の上で、古いものと新しいもの、固いもの、頑固なもの、破壊しがたいものと新鮮なもの、柔軟なもの、たまらぬ魅力あるものとのたたかいを、実際に目で見て考察したいと望まぬものはないだろう」

ホノーリオがはいってきて、馬を出してきたと告げた。すると夫人は伯父に向って言った。「馬で山にのぼりましょう。そして今絵で見せて下さったものを、実際に見せて下さいませ。私がここに来ましてから、この計画のお話を伺いましたが、お話ではあり得ないことと思われ、絵で見ても本当とは思えないものを、今ではこの目で見たいというあこがれが、ますます強くなりましたの」「まだだよ」と侯爵は答えた。「今あんたが見たものは、これからそうなるかもしれない、そうなるだろうというすがただ。今はまだいろいろのものが停滞している。人工（芸術）は自然に対してひけをとるまいとすれば、まず完成をせねばならない」――「ではせめて山を登ってゆきましょう。たとえお城のふもとまでででも。私、今日はとても広々と世の中を眺めたい気がしますの」――「御意のままじゃ」と侯爵は

答えた。「ですが町を通って参りましょう」と夫人はことばを続けた、「大きな市の広場をこえて。あそこには小屋が数限りなく立って、小さな町か野営地のような姿になっております。まるで周囲のこの国に住む全部の家庭の必要品や仕事の内側が、ひっくりかえされて表に出され、この中心点に集められ、明るみに出されたようですわ。注意ぶかく観察する人なら、ここでは人間がなす仕事、必要とするものが、すべて見られるからです。一瞬、ここではお金は必要でなく、どんな取引きも、交換で果されると想像したくなります。実際根本ではその通りなのです。昨日夫の侯爵がこういう概観をするきっかけを与えてくれたときから、山地と平地が接しあうここで、両方が自分の必要なもの、のぞむものをこんなにはっきり口に出していると、考えるのは、まったく楽しいことでした。高地の人々はその森の材木を幾百の形に変え、鉄をそれぞれの使用に向くようにさまざまにすることを知っていますが、あちら側の平地の人々はさまざまの商品で高地の人に応えます。しかしその商品の材料はほとんど区別できず、目的もしばしばわからないのです」

「分っているよ」と侯爵が答えた、「わしの甥がこのことに最大の注意を払っていることは。というのはまさにこの時節には、出すよりも多く受取ることがもっとも肝要だから。けっきょくのところ、これを果すのが、国家の財政でも、ごくささやかな一家の家計でも、すべてだからな。ところでゆるしてもらいたいのだが、なあ、わしは市の広場や見本市を通って行くことはどうも気が進まんのだ。一歩一歩妨げられ、ひきとめられる。それにあのおそろしい不幸のことが、またわしの想像力の中で燃え上るのだ。こういう商品や財貨の山が燃え上るのを見たのが、いわばわしの眼に焼きついてしまったのだ。あのときわしは——」

「このすばらしい時間をぐずぐずしてすごすことはよしましょう——」と夫人はさえぎった。というのは、この尊敬すべき老人は、すでに二三度あの不幸の詳しい描写で彼女を不安にさせたことがあるからだ。つまり彼はある大きな旅行の途中、ちょうど大市で雑踏している広場沿いの最上の旅館で、ひどく疲れて床についたとき、夜になって、その宿に向って押寄せてくる叫び声と炎に起されて、おそろしい目に会ったのだ。

夫人は急いで愛馬に乗り、裏門から登り道でなく、表門から降り道を、なかばしぶしぶと、なかばいそいそとついてくる同伴者を案内した。だって、何人が彼女と馬を並べ、彼女についてゆくのを厭がるものがあろうか。いつも

ならあんなに熱望した狩猟からよろこんで残り、彼女にもっぱら仕えようとするホノーリオも同じことだった。

予想されたとおり、彼らはほんの一歩一歩としか馬を進められなかった。しかし美しく愛嬌のある夫人は、立ちどまるごとに、気の利いたことばで、気分を引立てた。「私、きのうの私のお説教をくりかえしますの。だって必要が私たちの忍耐力を試そうとするのですから」実際人波が乗馬の人たちまで押寄せて来たので、彼らはごくのろのろとしか道を続けることができなかった。民衆は歓喜して、若い夫人を眺めた。多くの微笑する人々の顔には、この国の第一の婦人がまたもっとも美しく、もっとも優美なのを見て、はっきりした満足があらわれていた。

岩やとうひや松の間にひっそりした住居をいとなむ山の住人、丘や野や草地から来た平地の人々、小さな町々の商工業者たち、その他集ってきたありとあらゆる人々が入りまじって立っていた。しばらくしずかに眺めたあとで、夫人は同伴の侯爵に向って、この人たちはみんな、どこから来たのであろうと、その衣服に必要以上の材料を、服地や麻布、飾りのリボンを手に入れていると感想をもらした。

「まるで女たちはいくらブカブカしても、男たちはいくらデコデコしても満足しないようですわ」

「彼らにそれは許してやろうよ」と伯父が答えた、「人間は、あり余るものをどこに使おうと、快いものだ。ことに身を飾り、めかし立てるときが、もっとも快いのだ」美しい夫人はうなずいて賛成した。

こうして彼らは、しだいに郊外に通じる空地まで来た。そこではたくさんの小さな小屋や屋台店の外れに、もっと大きな板囲いの建物が目についた。それが目にはいるかはいらないうちに、耳をつんざくうなり声がひびいて来た。そこで見世物になっている野獣たちの餌をやる時間が来たようだった。獅子が、その森と砂漠の声を力強く聞かせた。馬はおびえた。文明世界の平和ないとなみの中でも、荒野の王たるものは、かくも恐ろしく自分の存在を告げるものだという感想を禁じえなかった。小屋に近づくと、けばけばしい巨大な画を見逃すわけには行かなかった。それはどぎつい色と力強い絵で、あの異国の獣たちを描いたもので、平和な市民たちにそれを見たいという打ちかちがたい興味を起させるためのものだった。ものすごい巨大な虎が黒人にとびかかり、まさに引裂こうとしていた。一頭の獅子はおごそかに堂々と立ち、自分にふさわしいいかなる餌じきも目の前にないかのようだった。その他の奇妙な、多彩な動物たちは、これらの巨大な動物のそばでは、あま

り注意にあたいしなかった。

夫人が言った、「帰り道にはぜひ降りて、この珍しいお客たちを近くから眺めましょう」「ふしぎなことだが」と侯爵が言った、「人間はいつも恐ろしいことで興奮させられたがるものだ。小屋の中では、虎はまったくしずかに檻の中に寝そべっている。ところがここでは怒りくるって黒人にとびかからねばならない。人々がこの中でも同様にこんなものが見られると信じるように。殺人や撲殺、火事や破滅では事足りず、演歌師がいたるところの町角でそれをくりかえさねばならない。善良な人々はおびえさせられることをのぞむのだが、それは、そのあとで自由に息をつくのが、どんなにすばらしく結構であるかをますます強く感じるためなのだ」

こういう恐ろしい絵から受けた不安な気持が残っていたとしても、町の門を出て、この上なく明るい風景の中にはいってゆくと、すぐにすべては消えてしまった。道は最初川に沿って登っていった。まだ幅が狭く、軽い小舟しか運ばない川だったが、やがてはその名前のままで大河となり、遠い国々をうるおすことになる。道はさらに手入れのゆきとどいた果樹や庭園の間を通って、ゆっくりと登っていった。しだいにあたりはからっと開いた、人家の多い地帯がくりひろげられ、とうとうまず一つの茂みが、次に小さな森が一行を迎えいれ、この上なく快い風景が、次々に彼らの視線を区切り、また楽しませた。上の方に導く草地の谷が彼らを親しげに迎えた。その谷は二度目の草刈りを済ませたばかりで、ビロードのように見え、上方で急に勢よくほとばしり出た泉にうるおされている。こうして彼らは小高い見晴らしのきく地点に向って進んだ。森を出て、急な坂道をのぼったあとでそこに到着した。しかし目の前にはまだかなりの距離をへだてて、新しい樹々の群の上に、彼らの巡礼の目標であるあの古城が、岩と森の頂きとなってそびえているのが見えた。振返ると――いつでもここに来るまでに、振返らないことはないのだが――高い樹樹の間の偶然にできた隙間から、左手には朝日に照らされた侯爵の城と、かすかな煙にかすんだ山の手の町のりっぱな建築が見え、さらに右手に向っては、下町や曲りくねった川、その草地や水車が見え、向うには広々した豊饒な畑地がひろがっていた。

この眺めに堪能した後に、というよりむしろ、こういう高い場所から展望する場合によく起ることだが、もっと広い、もっとさえぎるもののない眺望へののぞみがますますつのって来て、彼らは石のごろごろした幅広い斜面をのぼ

っていった。そこからは真向うに、堂々たる廃墟が、緑の冠りをいただいた峯のようにそびえていた。わずかな老樹がずっと下のそのふもとにあった。彼らはその中を通りぬけ、こうしてちょうど最も急な、最も近寄りにくい側の前に立った。手前には巨大な岩が太古から、どんな変化にも侵されず、堅固に、どっしりと据っていた。それが上の方へ塔のように重なり、その間に落ちて来た岩は、巨きな岩盤や堆積となって不規則に重なり、どんな大胆な者にもすべての攻撃を禁じるように見えた。しかしけわしさ、烈しさは若い人の気に合うもののようである。こういう冒険、攻略し、征服するのは、若い腕や脚にとってひとつの楽しみである。夫人はひとつ試みたいという気を示した。ホノーリオは即座に応じた。伯父侯爵は、もっと無精だったが、まあよかろうと賛成した。それに体力の衰えを見せたくはなかった。馬は麓の木の下にとどめることにした。そして、突出した大きな岩が平たい場所を提供してくれるある地点まで、のぼることにした。そこからの眺望は、すでに鳥瞰図に近くなったが、それでもまだ十分絵画的に、前後が重なって見えた。

太陽はほとんど一番高いところにあって、はっきりした照明を与えていた。侯爵の城とその部分、主屋、翼、円屋根、塔などはまったく堂々と見えた。町の山の手は、すっかり広がって見え、下町もらくに中まで眺められた。いや望遠鏡を通してみると、市の広場の小屋まで一軒一軒区別できた。ホノーリオはいつも、このような有用な道具を肩にかける習慣だった。みんなは川を上下へと眺めた。川のこちら側は山らしくテラス状にとぎれとぎれの地形で、向う側はゆるやかに登りながら、平地と低い岡が交代する豊饒な土地である。村々は数えられぬほどあった。この高い所から見える村の数について争うのは、昔からの習いだったのだ。

広々とした野山の上には、真昼によくあるように明るい静けさがあった。古代の人々は、こういう時にパンの神〔牧羊神〕が午睡して、全自然は彼を目醒まさぬように、息をとめていると言ったものだ。

「これが最初ではありませんが」と夫人が言った、「こういう高い、遠くまで眺められる場所にくると、いつもこんな感想が浮びますの。澄んだ自然はこんなに清らかに、平和に見え、この世には何一つ厭なものはあり得ないような印象を与えます。しかしまた人間の住み家に帰ると、高いところでも、低いところでも、広くても、狭くても、いつも何か戦ったり争ったり、調停したり、整えたりすること

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo